知識の花弁

三田メディアセンターだより

No.2
2013秋

統計で見る 三田メディアセンター

知って良かった ツール＆サービス
新聞のすゝめ

コレクションの広場
小山内文庫

図書館の舞台ウラ
貴重書のためのミニ図書館

貴重書紹介
『源氏物語』「末摘花」

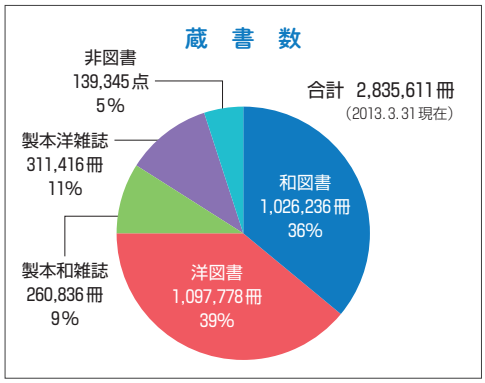
スタッフレポート
目から鱗が落ちた！「スペシャル・コレクション」

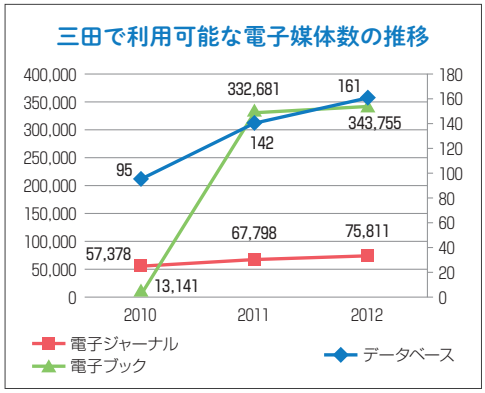
主な出来事（2013.4-2013.9）

慶應義塾図書館

統計で見る 三田メディアセンター

基本統計





施　設

三田キャンパス内の3つの図書館（室）[図書館（新館）、図書館旧館、南館図書室] の2012年度1年間の入館者数は、約71万人にものぼります。入館者は学生だけではなく、教職員や塾員、塾内の高校生、早稲田大学や一橋大学といった協定校に所属する方々なども含まれます。1日あたりに換算すると2,600人になり、日々多くの方が利用しているのがわかります。

施　設

床面積	21,541 m²
座席数	1,252 席
入館者数	708,468 人/年

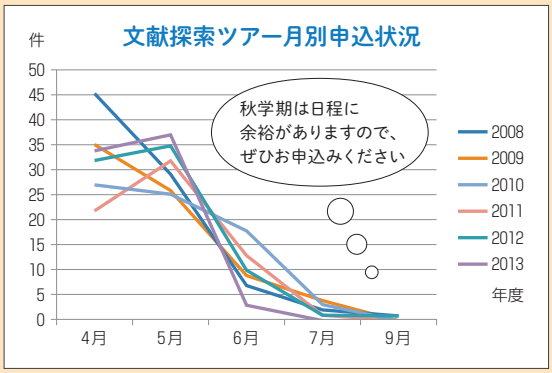
蔵書数

蔵書冊数は、なんと2,835,611冊。加えて、日々新しい図書や雑誌を受け入れているため、3つの図書館（室）をもってしても、全ての資料を配架することができないほどです。やむなく、研究室棟の地下書庫や、日吉保存書庫、白楽サテライトライブラリー、山中資料センターなどに別置していますが、これらの資料も取寄せることが可能です。また、慶應義塾図書館は昔から洋書に強い図書館といわれており、和洋の割合を見てみると図書・雑誌ともに洋の割合が多いのが見て取れます。

電子媒体

三田で利用可能な電子ジャーナル、電子ブック、データベースなどの電子媒体の数は近年急激に増加しています。以前は外国語の資料が多かったのですが、日本語の資料や、リモートアクセスにより自宅から利用できる資料も増えています。多くは卒業後には利用できなくなりますので、悔いの残らないように、在学中に思う存分使ってください。

Q 文献探索ツアーは春だけ?



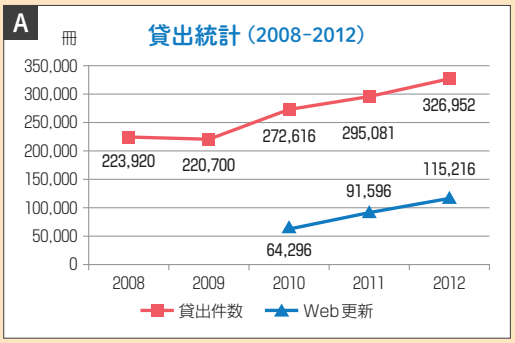
A 希望のテーマに沿った図書館案内を行う「文献探索ツアー」は、4、5月に申込みが殺到します。例年、年間で約80回のツアー申込みがありますが、その8割は4、5月に実施されます。特に4月は大人気です。第1回の授業で図書館の使い方を教えてほしいという先生方からの要望もあり、4月に5月の倍の数のツアーが行われていたこともあります。ところが、2011年を契機に少し様相が変わってきました。4月と5月の回数が逆転しているのです。2011年は東日本大震災の影響があり、授業開始が遅れました。当時はそれが理由だと思っていたのですが、その傾向は2年後の今年も続いています。4月は混雑のために希望日にツアーができず、5月にずれ込むという理由もありますが、ゼミで討議したいテーマが大体決まってから申込む例も増えてきました。漠然と「経済学関連の資料の探し方」と言われてしまうと、経済学で使うデータベースや資料を表面的に紹介することになりますが、「ドイツの戦後の経済政策がテーマ」と言われれば、もう少し具体的に資料を案内したり、ドイツの統計の集め方を紹介したりといったこともできます。右上の統計が示す通り、5月を過ぎれば希望の日時を予約しやすくなります。また、ツアーを実施したゼミごとに「ゼミ別基本資料」と題するテーマに沿ったデータベース・資料一覧をウェブページ上に作成し、ツアー後も便利に使える工夫をしています。文献探索ツアーの申込みは年間通して受け付けていますので、ぜひご活用ください。

Q どのぐらいの本が借りられている？ 人気のテーマは？

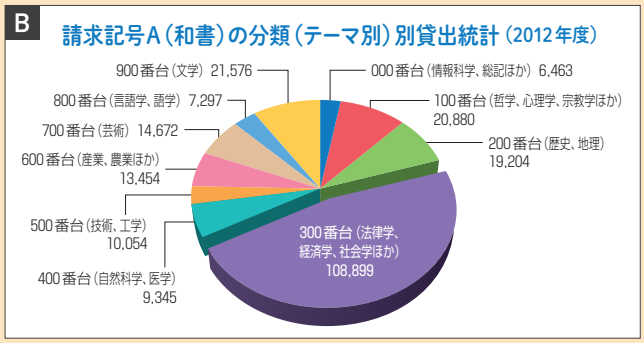
A 過去３年間の貸出件数は毎年増加を続けています。これに一役買っているのが、2010年度の図書館システム変更により、Webでの更新（返却期限延長）が可能になったことです。図Aの通り、Web更新の伸びと貸出件数の伸びが一致していることが見て取れます（更新も貸出としてカウントしています）。次に、借りられている資料の内容を見てみましょう。2012年度の請求記号別貸出数では、請求記号がAではじまる資料（和書）が231,844件と全体の７割を占めています。その中では分類（請求記号の数字部分）が300番台となる、社会科学分野（法律学、経済学、社会学等）の資料が47%（108,899件）と大変よく利用されています（図B）。

利用者の観点で見てみると、昨年１年間に三田メディアセンターの資料を借りた方は約14,000人、学部生では9,800人以上の方が資料を借りていました。学部生の平均貸出件数は18.8件でした。

A



B

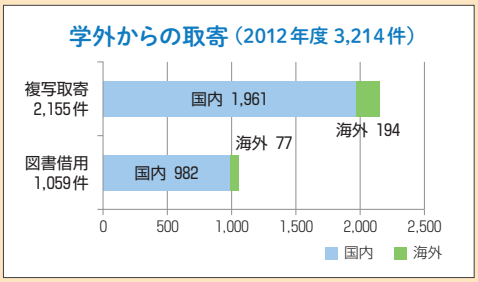


Q 慶應に無い資料をどのくらい取寄せている？

A 2012年度は、複写取寄が2,155件、図書借用が1,059件でした。毎年同じくらいの申込み件数です。近年、大学紀要や学会誌など、インターネット上に公開される文献が増え、取寄件数の減少も予想されていましたが、一方で、国内外にひっそり所蔵されていた資料の存在がインターネットで見つけられるようになり、一般刊行物以外や海外の文献の取寄も気軽に申込みされるようです。以前は、地方や海外での文献収集も研究の一環であったものも図書館に任されるようになったということでしょうか。

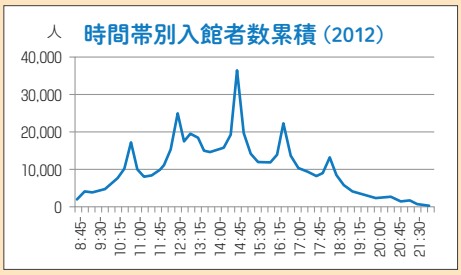
海外からの取寄も全体の１割に迫る勢いです。メールやシステムを介した地球の裏側の図書館とのやりとりに、担当者は一喜一憂、やきもきしたり感謝したりの毎日です。

1,000件を越える図書借用には、古い資料が多く含まれます。大切な蔵書をお借りしているので丁寧に扱うよう利用者の方にお願いしています。



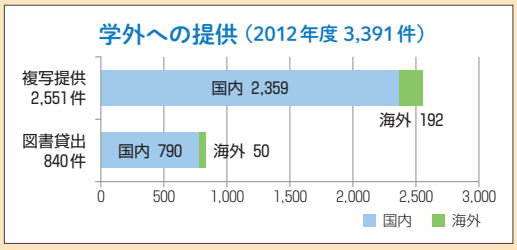
Q 空いているのはいつ？

A 図は、2012年度１年間の入館者データを、時間帯別に累積したものです。５か所、突き出ている部分は休み時間にあたります。休み時間を活用して、多くの方が図書館を利用している様子がうかがえます。この統計は、この時間帯に図書館に入館した利用者の数であって、必ずしも図書館の混雑状況を示してはいませんが、それでも午前中と午後６時以後は、比較的利用者が少ないことが予想されます。落ち着いた静かな環境で図書館を使いたいと思ったら、これらの時間がねらい目といえそうです。



Q 他の大学から必要とされる三田の資料はどのくらい？

A 2012年度は、複写提供が2,551件、図書貸出が840件でした。例年、学外への依頼と同程度かそれを超える件数の依頼を受け付けます。慶應義塾図書館は歴史も古く蔵書も多いことに加え、目録情報の整備も進んでいるため、他大学にはなく慶應に所蔵があるからと依頼されることも多いのです。海外からも100件を超える依頼が来ます。慶應の蔵書がはるばる海を越えて利用されます。



知って良かった　ツール＆サービス

新聞のすゝめ

新聞ほど、多種多様な媒体で存在する資料はありません。メディアセンターの所蔵する新聞は、一口に「新聞」といっても、原紙、縮刷版、原版製本、マイクロ資料、DVD-ROM、契約データベースといった、実にさまざまな形態で利用することができます。ここではそれぞれの形態の「新聞」について、簡単にご紹介します。

・・・

原　紙

1階ラウンジには、およそ100紙もの国内外の原紙が見渡す限り並んでいます。その中には、エジプトやインド、トルコやベトナムといった、ふだんあまり見かけない言語の新聞も見られ、世界中の国々の日々の情勢が、一目でわかる空間になっています。最新のものは1階ラウンジにあり、それ以前のものは3階の新聞ファイルにあります。また、3階カウンターで出納するものもあります。

1階ラウンジにならぶ原紙

縮刷版・原版製本

縮刷版は2階西閲覧室にあります。新聞の紙面を縮小し冊子体にした形で、毎月1回刊行されています。朝日新聞や読売新聞、毎日新聞、日本経済新聞などの全国紙があります。また、新聞そのものを製本し、冊子体の形にした原版製本もあります。日本語・中国語・朝鮮語は旧館地下2階に配架され、欧文・その他の言語は旧館3階カウンターで出納します。冊子体のため手軽に見ることができ、一覧性が高く、全体の紙面の構成なども把握しやすいことが特徴です。

縮刷版

マイクロ資料

マイクロ資料は3階あるいは地下4階にあります。紙面をマイクロフィルムに焼き付けたもので、専用のリーダーで拡大して閲覧、印刷できます。閲覧の手続きは3階カウンターにて受け付けています。海外の新聞は縮刷版がないため、保存用にマイクロを購入し、原紙を廃棄しているものもあります。

マイクロ資料とマイクロコーナー

マイクロ拡大写真

契約データベース

データベースナビから、メディアセンターで契約している新聞データベースを利用することができます。朝日新聞（聞蔵Ⅱビジュアル）、読売新聞（ヨミダス歴史館）、日本経済新聞（日経テレコン21）、毎日新聞（毎索）、産経新聞（The Sankei Archives）などの国内の全国紙がオンラインで利用でき、New York TimesやWall Street Journalといった海外の主要紙も、ProQuest Newspapers / Historical NewspapersやLexisNexis Academicで、バックナンバーや最新の記事全文を閲覧することができます。また、Newspaper Directのように、世界各国の新聞の紙面を横断的に検索できるデータベースもあります。多くは学外から慶應IDを使って利用可能なため、時間や場所に制限されずに、記事全文の検索や閲覧が可能です。また、日刊工業新聞のようにDVD-ROMで刊行されるものもあります。

・・・

このように、メディアセンターが所蔵する新聞は、タイトルや刊行年代によって、媒体が異なります。個々の新聞タイトルから、KOSMOSや電子ジャーナルリストで検索できるタイトルもあります。ウェブサイトの「新聞リスト」や、資料の探し方の「新聞を探す」、あるいはデータベースナビといったメディアセンターのツールをおおいに活用し、さまざまな「新聞」にふれてみてはいかがでしょうか。

コレクションの広場

小山内文庫

小山内文庫は、明治・大正期の演劇改革の旗手である小山内薫（1881–1928）の旧蔵書です。小山内は明治43（1910）年から大正12（1923）年までの約13年にわたり慶應義塾大学文学科の講師として、劇文学の講義を受け持っていました。また、1910年5月に創刊された『三田文学』に創作・翻訳・論評などを度々寄稿するなど義塾との関わりは深く、47歳の若さで亡くなった際には残された遺児への教育基金が社中で募られたほどでした。

演劇関係の旧蔵書（洋書4,004冊、和漢書2,000冊の計6,004冊）は、昭和5（1930）年に三田文学と関わりの深い水上瀧太郎・水木京太による斡旋を受け、福澤桃介・小林一三・平田篤次郎・松永安左衛門ら10名の塾員有志による寄付金の提供を受けて義塾で購入し、図書館へ収められることになりました。洋書は主に1912年末から1913年夏のロシア・ヨーロッパ外遊（観劇旅行）の際に購入したもので、英語、仏語、独語、露語など多様であり、欧州近代劇作家の作品及び批評をほとんど網羅した資料群となっています。中には、1927年にモスクワ訪問の際に入手したロシアの演出家メイエルホリド（Всеволод Эмильевич Мейерхольд）や劇作家チェーホフの甥である名優ミハイル・チェーホフ（Михаил Александрович Чехов）のサイン入りの書物もあります。2013年には、これらの資料の目録情報がKOSMOSへ登録され、検索が可能となりました。

小山内文庫の蔵書には、小山内家の紋（左金輪巴（ヒダリカナワトモエ））と葡萄があしらわれた蔵書票が貼られています。築地小劇場のシンボルマークでもある「一房の葡萄」は、ギリシャ神話の酒と演劇の神であるバッカスに由来しています。小山内は便箋や蔵書票、ペーパーナイフにもこのマークをつけるほど気に入っていたそうです。

旧蔵書の他にも、小山内が外遊時に収集した演劇関係の絵葉書や築地小劇場創設のポスターなどの遺品もコレクションに含まれています。絵葉書は、ロシア・ドイツ（オーストリアを含む）・イギリス・北欧諸国・フランス（ベルギー含む）で上演されていた舞台写真や俳優のポートレートで、小山内が実際に観劇し、資料として持ち帰ったと考えられています。絵葉書自体は非公開ですが、一部はデジタル化され、デジタルギャラリー[1]で公開されているほか、写真入りの目録[2]で見ることができます。

図書館旧館東側の「文学の丘」には小山内薫の胸像が設置され、傍には小山内を偲んで詠まれた久保田万太郎の句碑も建っています。芸術の秋に三田演劇散歩をしてみてはいかがでしょうか。（原田奈都子）

1) Digital Gallery of Rare Books & Special Collections 内 小山内薫演劇絵葉書コレクション（http://project.lib.keio.ac.jp/dg_kul/card_about.html）
2) 宮下啓三, 小平麻衣子目録作成 『小山内薫の演劇絵葉書：地域別・作家作品別の目録』慶應義塾大学三田メディアセンター, 1995

図書館の舞台ウラ

貴重書のためのミニ図書館

皆さんは貴重書室をご存じでしょうか？ 図書館5階の奥まったところに事務室兼用の閲覧室と24時間空調された書庫からなる貴重書室があります。入室には事前の申請と予約が必要なため、皆さんにはあまり馴染みのない場所かもしれません。貴重書室には、和漢の古典籍（和書及び漢籍）約5,500冊と洋図書約3,300冊が所蔵されています。さらに古文書（約5,000点）や浮世絵（約2,300点）、福澤関係資料（約600点）、ほかに博物資料などもあり、なかには国指定の重要文化財や世界的な稀覯書も含まれています。これらは主に塾内外の研究者の閲覧に広く供されていますが、指導教員の推薦があれば学部生でも閲覧することができます。卒論執筆などで貴重書に辿り着いた時には諦めずに図書館1階のメインカウンターで閲覧を申請してください。

貴重書室の概要はこのくらいにして実際の業務を紹介しましょう。図書館では資料の選定、目録作成、装備、配架、書庫管理、閲覧やレファレンス対応など各業務の担当部署が異なります。しかし貴重書については、これらの業務のほとんどを貴重書室の職員が担当します。いわば図書館の中にある貴重書専門のミニ図書館と言えるでしょう。さらに展示業務も貴重書室の特徴です。今秋の「『百科全書』情報の玉手箱をひもとく ～ドニ・ディドロ生誕300年記念～」展（10/9～10/15 丸善・丸の内本店）で25回目を迎える慶應義塾図書館貴重書展示会や展示室の館内展示では、貴重書室が準備の中心的な役割を担っています。また近年では、出版物掲載やテレビ放映で使われる画像を提供するため、これらの撮影手配や許諾手続きなどの業務が増えています。図書館の提供する画像というと学術的で堅いイメージがありますが、クイズ番組の回答として放映される「福澤諭吉肖像」、情報番組で土用の丑の日に鰻を食べる風習の起源となったキャッチコピーを作った人物として紹介される平賀源内の肖像など、多種多様な要望があります。

このように貴重書室の業務は多岐にわたりますが、最も重要なのは人類の文化的遺産ともいえる貴重な資料を大切に保存していくことです。貴重書室ではこれらの資料を研究や教育に活用しながら、次世代に守り継いでいけるよう日々の業務に取り組んでいます。

（貴重書室担当）

貴重書紹介

『源氏物語』「末摘花」 伝藤原良経筆〔鎌倉中期〕写　1帖

綴葉装　後補白茶色地作土花菟文金襴錦表紙（24.4×15.7cm）　料紙やや薄手の鳥の子
4折墨付58丁　半葉8行　字面高さ約20.2cm　2代畠山牛庵・弐楽軒鑑定極札付き　［132X@191@1］

佐々木　孝浩（斯道文庫教授）

義塾図書館が所蔵する日本古典籍の貴重書の性格について、2009年の貴重書展『義塾図書館を読む』の図録で、「注釈書あるいは古典の研究書が多くて、古典の本文のみのものは少ない」とまとめたことがある。この傾向は、見栄えのする名品より研究的な価値の高い優品を選択した蔵書構築の方針の結果であり、大学図書館として評価されるべき姿勢である。とはいえアジアで唯一「グーテンベルク42行聖書」を所蔵する館が、日本を代表する古典文学作品の善本を所蔵していないことは、やはり些か寂しいことではあった。

『源氏物語』に関しては、研究と展示両方の価値を有する、17世紀前半に書写された豪華な『源氏物語』54帖揃本［132X@158@1～54］が、前記の展示会に先立って収蔵されたのは喜ばしいことであったが、古写善本としての物足りなさは否めなかった。ところが開館101年目を迎えた今年度、ついに『源氏物語』の古写本1帖が加わったのである。

僅か1帖かと思われるかもしれないが、この物語の古写本は纏まって存するものは極めて少なく、1帖単位で伝存する場合も多いのであり、絵巻を除くと鎌倉時代以降の写本しか現存しないことからすれば、13世紀半ば頃の書写と推定できる本書は、屈指の古写本と言えるのである。

『源氏物語』の本文は、鎌倉前期の著名な歌人学者である藤原定家の所持手入れ本を祖とする「定家本（青表紙本）」と、鎌倉幕府に仕え共に河内守となった源光行・親行父子の校訂本の系統である「河内本」、そしてそのどちらにも属さない伝本の総称である「別本」とに3分する説が通用しているが、本書はその「河内本」に属するものである。

「河内本」は、建長7年（1255）に最初の完成を見たと考えられ、3年後の正嘉2年に親行の本を書写させたとの北条（金沢）実時の奥書を有する、名古屋市蓬左文庫蔵の所謂「尾州家本」（重文）が代表的な伝本であるが、この記述を書写時のものと見ずに転記したものとする見解も有力である。この尾州家本の「末摘花」帖と本書を比較すると、本文は仮名遣い等に相違が認められるものの極めて近い関係にあり、印象のレベルではあるが、書風などからして本書の方が僅かながら古く感じられるのである。勿論これだけで本書を河内本「末摘花」帖の最古写本と断定するのは早計に過ぎるが、尾州家本の正嘉2年書写説の検討にも重要な資料となる存在であることはお判りいただけるであろう。

また本書の注目できる特徴は書写の古さばかりではない。「尾州家本」は32.0×25.5cmと大きく、金沢北条氏周辺の写本に目立つ極めて特殊な寸法である。一方本書は鎌倉時代写本としては通常の大きさのようではあるのだが、当時の『源氏物語』写本は系統を問わず16cm四方程度の正方形が普通であり、和歌関係の本では一般的な長方形はかなり珍しいのである。「尾州家本」は1頁11行書きで、正方形の写本も10乃至11行書きが普通だが、本書はかなりの上質紙に、鎌倉前期の書の名手でもある歌人藤原良経の書流を受け継ぐ人物によって、8行でゆったりと書写されており、一目で素性の良さが窺えるのである。「尾州家本」に先立つとなれば、「河内本」成立当初の形態を伝える可能性もあろう。

豪華な表紙は後のものだが、扉として元の表紙が保存されているのも、古写本の表紙の残存率の低さからして希有なことである。その左肩に直書きで「すえつむはな〈第三のならひ〉」（〈　〉内は小字）と外題が記されているが、その筆跡は弐楽軒なる人物（江戸前期の歌人学者伊藤栄治カ）によって南北朝期の二条為忠筆と鑑定されている。疑わしい鑑定であるにせよ本文よりやや下るとの推定は貴重であろう。「ならひ」とは、その意味が未解明の『源氏物語』の巻同士の関係を示す「並びの巻」のことで、「本の巻」に対応し、第三番目の本の巻である「若紫」に並ぶ巻であることを示している。この他、本文に存する朱筆による句点・合点や声点、それぞれ本文と異筆と思われる注記と校合書入れ等の情報も、学術的に貴重である。

「河内本」は意味を通りやすくした校訂本文だとして近時の評価は低いが、その受容の歴史に鑑みて、また「定家本」や「別本」の性格を考える上でも重要な系統であることは疑いない。これまで学界に知られなかった「河内本」成立期の写本が、僅か1帖のみでも義塾図書館の所蔵となったことは、義塾にとってのみならず、国文学界においても大変喜ばしいことである、と評するのは些か思い込みが激しいであろうか。

筆跡鑑定書が貼られた見返しと古表紙の扉

本文第二丁裏と第三丁表の見開き部分

スタッフレポート

目から鱗が落ちた！「スペシャル・コレクション」

風間　茂彦（事務長）

ORLP年次大会に参加

6月の初旬に米国コネティカット州のYale大学で開催されたOCLCのResearch Library Partnership（ORLP）年次大会に参加する機会を得た。そこでこの紙面を借りてその報告を簡単にさせていただきたい。ORLPは北米を中心とした研究図書館の集まりであるが、アジアからの加盟館は現時点では我が慶應義塾大学メディアセンターのみである。メディアセンターは2002年にその前身であるResearch Library Group（RLG）に加盟して以来、ここに集まる図書館と常に最新の図書館状況や課題・施策を分かちあいながら、その時々で最善の図書館運営を目指して政策を展開し、国際連携活動の一つとして一定の成果を上げている。

イエール大学バイネッケ貴重書図書館の外観

今年のテーマは「スペシャル・コレクション」

年次大会は毎年旬のトピックをテーマに取り上げ、それについて論議して参加館が見地を広めることを主眼としているが、今年のテーマは、“Past Forward! Meeting Stakeholder Needs in 21st Century Special Collections”であった。つまりステークホルダーのニーズに合った今後のスペシャル・コレクションの在り方を考えるということだ。前年の大会では、今後の研究図書館の課題は「研究者支援」と「スペシャル・コレクション」と「独自の特色を持ったスペース」であるという基調講演があったので、近未来の研究図書館の進むべき方向の道標となるべき重要な3つのテーマの一つであるという位置付けである。実は「スペシャル・コレクション」という括り方は、日本の図書館界ではあまり一般的ではないのだが、ここでの定義は「貴重書」・「マニュスクリプト（写本）」・「アーカイブ（文書）」を包括したものになる。三田メディアセンターは全塾的に考えると、こうした資料類を一番多く所蔵する図書館なので、そうした意味で我々にはとても近しいテーマ設定であったと言える。

2つの強烈な印象

3日間に渡ってワークショップと事例報告とパネルディスカッションが展開されたが、その詳細をここで報告する紙面は残念ながらない。そこで今回は最も印象に残ったことを2つだけ報告したいと思う。まず何より、「スペシャル・コレクション」の収集が、その組織あるいは組織母体の「Mission（使命）」と密接に結びつくべきだという考え方には驚かされた。すなわち「貴重＝スペシャル」という短絡的な結びつきではなく、それぞれの組織の独自のミッションを反映したものだからこそ、「スペシャル」であるいという考え方である。それゆえ「スペシャル・コレクション」自体がそれを所有する組織の存在をアピールする道具にもなり得るということである。こうした枠組みでとらえると、コレクション採択にあたっては全組織的な包括的視点が必要だということになる。そこから「スペシャル・コレクション」は組織ないしは組織母体のステークホルダーと結びつかねばならないという姿勢が生まれてくるのである。次に、「スペシャル・コレクション」を単なる「遺産」と考え大切に保管するだけではなく、より積極的に使ってゆこうとする姿勢が強いということにも大層驚かされた。守りではなく攻め、つまりアウトリーチである。それは展示会を開催するといったようなレベルを超え、授業で、それも学部の授業でどの様に使うかといったレベルである。教育活動の中にアウトリーチして、教室で「スペシャル・コレクション」が利用され、それが実際に教育効果を上げることに役立てば、そうした資料の収集意義は益々高くなる。例えば「スペシャル・コレクション」の中の作家の手稿とか、書簡とか、初期印刷本に施された美しい装飾などに間近に接した時の感動には言い知れないものがあるはずである。それゆえ、そうした資料としての絶大な力、すなわち〈資料力〉を教育活動に使わない手はない。この力は、高精細デジタル画像などの及ぶところではない。そうした活動があってこそ、ステークホルダーは他では得難い満足を得ることができ、その結果組織の存在価値は高まる。これこそ使命を達成する道になるというストーリーが描けるのである。これまでスペシャル・コレクションの類は、いわゆる普通の図書や雑誌をメインコレクションとすると周辺的（マージナル）なものと捉えられがちであったが、こうしたアウトリーチの実践によって、図書館活動の中心に浮上することになる。

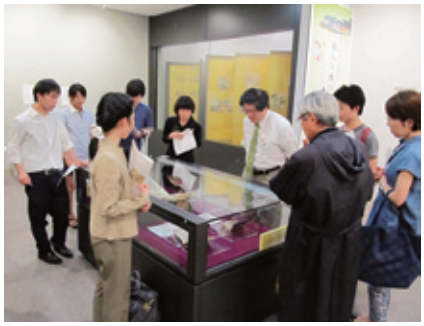
偉大なるバイネッケ

今回、本大会に先立って開催されたワークショップの会場となったのは、Yale大学のキャンパスにあるBeinecke Rarebook & Manuscript Libraryであった。ここは今年開館50年を迎えた貴重書を専門に収蔵する図書館であるが、研究者垂涎のコレクションを所蔵することはもちろんのこと、一切窓がなく周りを薄い大理石の壁で囲んだ独特の建物は、米国のモダニズム建築家Gordon Bunshaft（1909-1990）の代表的建築として広く世界に知られている。館内に足を踏み入れると、その壁を通した柔らかな光が大きな空間を優しく満たし、中心に古今東西の貴重書が並んだガラス張りの書架が聳え立つ。訪れた者は、薄明りに照らし出された美しい書籍の塔の光景にただただ圧倒されるばかりである。ライブラリアンとして、そんな空間に身を置きつつまさに至福の時を過ごしたわけだが、しかしそれが計算され尽くした仕組みであることに気がついた。つまりアウトリーチの一つの形態がこの露出性なのである。すべてはそこから始まると言っても過言ではない。ある意味でまことに政策的な建物であるということだ。ひさしぶりに訪問した米国の図書館であったが、表面的な現象はともかくとして、やはりその伝統に基づくライブラリマネジメントの正当性には、あらためて敬意を払わざるを得なかった。

イエール大学バイネッケ貴重書図書館の内部

主な出来事（2013.4－2013.9）

300回を超えた企画展示



図書館内で開催している企画展示がついに300回を超えました。館内展示の歴史は初代監督（館長）田中一貞の発案で大正年間に開催された月次展覧会まで遡りますが、現在第1回と数えているのは1954年4月に開催された「日本古刊本展観書解題」展です。奈良時代から江戸時代初頭までの古刊本85点が出品され、記念すべき出品資料1番は「法隆寺百万塔陀羅尼」でした。その後、慶應義塾や福澤諭吉に関する展示はもちろん、文学、書物、歴史、経済、浮世絵など、多種多様なテーマを設定して開催を続けてきました。そして約60年の時を経て、今春300回記念展示「日本の食文化 －魚菜文庫を中心に－」を開催し、好評を博しました。

館内展示で画期となったのは2011年10月の展示室の新設です。壁面展示ケースの設置により、掛け軸や屏風といった立体的で大きな資料も展示可能となりました。また最近は教員監修企画の際に、監修の先生による学生向けギャラリートークも実施しています。資料を見ながら専門家の興味深い話を聞くことができる貴重な機会となっています。

日・EUフレンドシップウィーク「EUと世界遺産」を開催

三田メディアセンターに設置されているEU情報センターでは、毎年5月9日のヨーロッパ・デー（欧州連合の誕生日）を中心に、展示やEUクイズを中心としたイベント「日・EUフレンドシップウィーク」を開催しています。

EU情報センターとは、欧州委員会がEUに関する情報を提供するために世界各国に設置しているセンターです。欧州委員会出版局から寄贈を受けた豊富なEU公式資料（官報・雑誌・統計・図書等）を利用者に提供することで、EUの広報活動に努めています。

2013年のテーマは、「EUと世界遺産」でした。5月7日から25日の3週間にわたり、図書館2階にてパネル展示を行いました。また、EU限定ハローキティストラップなどのオリジナルグッズがもらえるEUクイズの参加者は64名でした。

パネル展示では、メディアセンターのスタッフたちが旅先で撮影したたくさんのEU諸国の世界遺産の写真を、地図に貼って紹介しました。圧倒的な世界遺産の数をほこるEUの存在をアピールすることで、EUへのさらなる理解を深めていただけたのではないでしょうか。

3つのルールを変更しました

2013年度に入り、図書館の利用に関して以下のようにルールを変更しました。

1. **ペットボトルや水筒による水分補給OK**
2. **パソコン利用可能席が大幅増加**
3. **1階エレベータ付近は携帯電話で通話OK**

人文社会科学系の研究図書館にとって、蔵書は古くなっても価値を失うことはありません。絶版で買い換えのできない資料を永く保存するために、水濡れによる汚損は大敵です。しかし、この数年でフタのあるペットボトルや水筒などの持ち歩きが、日常的な行動として定着しました。

また、三田メディアセンターの閲覧室はとても静かです。論文作成や思索に集中する時、キーボードや携帯の着信音は思いの他、大きな騒音になります。しかし、携帯からスマホに移行し、キーボード音はなくなり、KOSMOSやデータベースの検索に使う道具に代わりました。

そこで、他キャンパスから遅れること数年、ようやくこれらのルール変更に踏み切りました。

編集後記

知識の花弁、第2号はいかがでしょうか？ 統計数字を通じて、図書館の様子を身近に感じていただけたら幸いです。図書館スタッフは、利用者の皆さんに少しでも図書館を知ってもらい、活用してもらえるよう、今後も努力していきます。暑い夏も終わり、「読書の秋」到来です。「図書館は宝の山」です。研究に！ 勉学に！ 大いに図書館を利用してください。今後の発刊にむけ、ご感想、ご希望等ありましたら、是非お聞かせください。

編集・発行　慶應義塾大学 三田メディアセンター
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
TEL 03-5427-1654　FAX 03-5484-7780
発行日　平成25年10月1日
印　刷　有限会社 梅沢印刷所
http://www.mita.lib.keio.ac.jp